

若手が核となり和牛産地再興

地域内の連携進め みんなが儲かる関係築く



愛知県の J A 愛知東和牛部会は、繁殖農家が高齢になる中、若手生産者が中心となり、子牛の出荷作業を手助けしたりするヘルパー組合や、飼料の収穫などを請け負うコントラクター^{※1}の組織化などに取り組み、高齢になっても和牛繁殖を続けられる産地づくりを進めてきた。耕種農家と連携した稲 WCS (稲発酵粗飼料)^{※2}利用組合、酪農家と組織する E T (受精卵移植)^{※3}活用推進協議会など、繁殖農家だけでなく地域内のさまざまな農家、人材を巻き込み、みんなが儲かる関係を築き、地域農業を活気づけている。

高齢産地の課題解決へ 若手生産者が提唱

和牛部会は、和牛子牛を生産する53戸で構成する。部会の規模は、繁殖用雌牛の飼養頭数が750頭、子牛の年間生産量が600頭前後だ。和牛産地の復活に向けて中心となったのは、平成12年にUターン就農した天野勇治さん(52)。現在は、和牛部会の青年組織リーダーを務める。天野さんはサラリーマン経験から、将来ビジョンを組織として共有すること、組織力を発揮

して仕事に取り組みむことの重要性を理解していた。「個々の経営が安定していたときは良かったが、子牛価格が低下し始めると、高齢で作業が苦になる農家が出てくるなど、さまざまな問題が出てきた」(天野さん)。部会員が共通の目標を持って、力を合わせて技術や知識を広げ、酪農家などの部門と連携することができたら、和牛産地の復活につながると思った。こうした考えを、現和牛部会長で、当時 J A 畜産課長だった杉浦美之さん(59)に相談。杉



飼養状況について話す天野さんとJA愛知東畜産課の齋藤雅彦(さいとうまさひこ)課長

浦さんがベテラン部会員とのパイプ役となって、部会の将来像についての議論を重ねた。そこで目指したのが、若手や中堅農家が

和牛産地の復活に向けた取り組み一覧

	平成12年	平成15年	平成21年	平成25年
和牛部会の主な取り組み	楽する経営			
	ヘルパー組合設立 労力補完	女性の活躍(せり補助) 労力補完	酪農家等の和牛転向誘導(ヘルパー増員) 組織強化	新規参入者の受入(ヘルパー増員) 組織強化
	資材の共同購入 低コスト化	コントラクター設立(自給飼料) 低コスト化	稲 WCS 利用組合設置 低コスト化	種雄牛及び母牛の改良 繁殖管理の一元化 ET 協議会の設置
	市場運営の改善 販売強化	自給飼料の高品质化 高品质化	繁殖管理の一元化 売向上	種雄牛及び母牛の改良 高品质化 ET 協議会の設置 売向上

経営を発展させられる「儲かる経営」と、高齢になっても牛を飼える「楽する経営」の2つを進めることだ。

が栽培した WCS 用稲の刈り取り作業も受託し、ラッピングして運搬するまでを担っている。一般的なヘルパー組織は、若手の畜産農家が担っていることが多く、繁忙期が重なり人手が足りなかったり、年間を通して仕事が多かったりして採算が取れないことなどが問題となっている。一方、同利用組合は、ヘルパー60人のうち、和牛部会員が7割、新規就農したトマト農家など他品目の農家が2割、運送会社などの会社員や自営業者が1割と、地域のさまざまな人材

が参加していることが特徴だ。特に、運送業者は、飼料の運搬を引き受けることもあり、農業と他産業がともに儲かる関係を築いている。そして、ヘルパー組合と、大型汎用コンバインなどの農機を所有する愛知東飼料生産コントラクターが連携することで、「儲かる経営」を実現している。コントラクターと同利用組合による自給飼料の生産により、調達価格は、県内他産地に比べてソルゴーで3割、稲 WCS で6割も安く、コスト削減につながっている。初めは反対する声もあったが、飼料の品質も良いことが次第に広まり、徐々に利用者が増えた。現在は、ほとんどの部会員が利用している。



新城市畜市場での子牛のせり

「楽する経営」のため、高齢や傷病などで作業が困難な農家の市場への出荷作業や飼養管理を手伝うのが、平成12年に設立した J A 愛知東肉用牛ヘルパー^{※4}利用組合だ。ヘルパー組織は、高齢農家の市場出荷をサポートするだけでなく、稲作農家ら

が栽培した WCS 用稲の刈り取り作業も受託し、ラッピングして運搬するまでを担っている。一般的なヘルパー組織は、若手の畜産農家が担っていることが多く、繁忙期が重なり人手が足りなかったり、年間を通して仕事が多かったりして採算が取れないことなどが問題となっている。一方、同利用組合は、ヘルパー60人のうち、和牛部会員が7割、新規就農したトマト農家など他品目の農家が2割、運送会社などの会社員や自営業者が1割と、地域のさまざまな人材

が参加していることが特徴だ。特に、運送業者は、飼料の運搬を引き受けることもあり、農業と他産業がともに儲かる関係を築いている。そして、ヘルパー組合と、大型汎用コンバインなどの農機を所有する愛知東飼料生産コントラクターが連携することで、「儲かる経営」を実現している。コントラクターと同利用組合による自給飼料の生産により、調達価格は、県内他産地に比べてソルゴーで3割、稲 WCS で6割も安く、コスト削減につながっている。初めは反対する声もあったが、飼料の品質も良いことが次第に広まり、徐々に利用者が増えた。現在は、ほとんどの部会員が利用している。

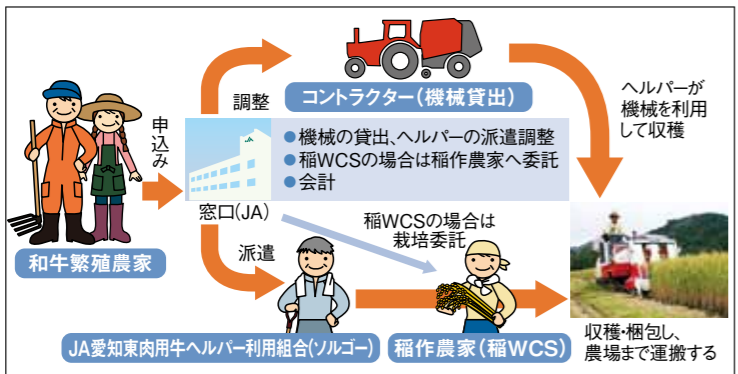


稲 WCS を利用する天野さん



稲わらをラッピングするヘルパー利用組合員

安価な飼料を生産する作業受託システム



地元の畜産業者が中心となり、子牛の出荷作業を手助けしたりするヘルパー組合や、飼料の収穫などを請け負うコントラクター^{※1}の組織化などに取り組み、高齢になっても和牛繁殖を続けられる産地づくりを進めてきた。耕種農家と連携した稲 WCS (稲発酵粗飼料)^{※2}利用組合、酪農家と組織する E T (受精卵移植)^{※3}活用推進協議会など、繁殖農家だけでなく地域内のさまざまな農家、人材を巻き込み、みんなが儲かる関係を築き、地域農業を活気づけている。

地元市場の評価高め 生産者の所得向上へ

部会員の主な出荷先は、新城市にある新城市畜市場。全国的には決して規模の大きくない地方市場で、この市場の評価を高め、来場者を増やすことが、部会員の経営安定につながるだけでなく、肥育農家を合わせた地域の畜産業の底上げになる。そのため、取り組みの一つが、部会員が所有する母牛の情報

を公開し、部会全体で行う血統改良だ。良質な子牛を生産するためには、その親である母牛の血統のレベルアップを図らなければならないが、県内の肥育農家からは「母牛の血統が古い」と指摘されていた。こうした課題に対応するため、平成22年から青年組織が主体となって、部会員の母牛ごとにおすすめの種雄牛を提案している。種付けは強制ではなく、部会員の判断で行うが、最新の血統知識が不足している部会員もおり、部会全体で優良子牛の生産につなげていく。優良な母牛の更新も課題だ。「先進地に比べ2世代ぐらい遅れている」(天野さん)ため、更新のスピードアップの狙いもあり、E T を積極的に進めている。優良な種を付けた受精卵を、酪農家の乳用牛の腹を借りて出産させる技術だ。酪農家にとっても、生まれた子牛は通常の乳用種よりも高く売れ、子牛を育てる手間が省けるメリットがある。E T は部会員の一部分で行われていたが、平成25年に酪農部会とともに、「愛知東 E T 活用推進協議会」を立ち上げ、両者にメリットがある仕組みを築いた。



部会長 杉浦美之さん

部会青年組織リーダー 天野勇治さん

JA愛知東

愛知県東部に位置する4市町村が管内。標高50~900mまで、高低差が大きく起伏に富んだ中山間地帯。年間平均気温は、約14℃で、平地に比べ夏は涼しく、暑さに弱い牛には快適な環境。和牛繁殖の歴史は古く、400年前の江戸時代には川手村(現・新城市作手地区)で、「杉牛(すぎだいらうし)」と銘打って四国まで出荷し名声を博したとの記録がある。



「みかわ牛」や「鳳来牛」といった地元和牛のブランド価値を高めていくことにも力を入れている」と話している。

※1 コントラクターとして大型コンバインなどの高性能の農機を所有し、飼料の収穫作業を効率的に進める組織。個々の農家で農機を所有するコストを抑えられる。
 ※2 稲の実と茎葉を同時に収穫し発酵させた牛の飼料。水稲を出穂期以降に収穫して、ロール状に梱包し、さらにラップ材でラッピングする。稲に付着している乳酸菌により発酵させ、牛の餌とする。
 ※3 雌の胎内で受精させて採取した受精卵を別の雌牛の胎内に移植して受胎させる技術。同じ両親から生まれた子牛を同時に生産でき、高能力牛の大量生産を狙える。和牛の受精卵を乳牛の雌に移植するケースが多く、牛乳の計画生産と、和牛の生産ができる。
 ※4 和牛の繁殖経営で子牛の市場出荷、牧草の刈り取りなどの重労働の作業を手伝う人。こうした人材を組織化して産地として高齢の生産者をサポートする仕組みを築いている。